

# 令和6年度 学校経営計画に対する最終評価報告書

具体的取り組み	主担当	現状	評価の観点	実現状況の達成度判断基準	集計結果	分析(成果と課題) 及び 次年度の扱い(改善策等)	備考
1 一人一人の進路実現のために、3年間を見通した進路支援体制を充実させ、生徒に早期から高い志を持たせる。							
① 個人面談を通して生徒理解に努め、3年間を見通した進路指導を実践する。	進路支援課各学年会	教員による生徒との個人面談は十分に機能しており、生徒の評価も高い。学習への意欲を高めながら、進路に関する幅広い選択肢を提供していくことが大切である。	【満足度指標(生徒)】 教員との面談が自分の進路目標設定や進路実現に有効であったと思う生徒の割合	教員との面談が自分の進路目標設定や進路実現に有効であったと思う生徒の割合が A 98%以上である。 B 95%以上である。 C 90%以上である。 D 90%未満である。	ホーム担任との個人面談について「参考になっている」「少し参考になっている」が 1年 91.4% 2年 93.9% 3年 95.2% 平均 93.5% (第2回学習実態調査)	昨年度より3学年以外は若干ダウンしたが、概ね良好と考えられる。3学年は節目となる時期を抑え、生徒に寄り添った面談を実施したことが高評価の原因だと考える。教員に対する進路検討会議への参加の推奨や若プロでの講義を通して、進路支援に関する知識を提供する機会を増やしている。面談の際に、生徒達に様々な角度からよい刺激を与え、早期から高い志を持たせることを続けていきたい。	昨年度 ホーム担任との個人面談について「参考になっている」「少し参考になっている」が 1年 94.2% 2年 94.7% 3年 92.3% 平均 93.9% (第2回学習実態調査)
② 一人一人の進路実現のための放課後補習をより効果的に行う方策を検討する。	進路支援課3年学年会各教科	補習内容が合わない生徒には自習できる環境を与えている。これに関しては生徒からも教員からも一定の評価が得られてはいるが、より効果的なものにしていくために、個々に応じた補習課題や添削課題などを与えながら、自ら主体的に学習に取り組む姿勢を育みたい。	【満足度指標(生徒)】 放課後補習は効果的であると思う生徒の割合	放課後補習は効果的であると思う生徒の割合が A 90%以上である。 B 80%以上である。 C 70%以上である。 D 70%未満である。	放課後補習は効果的かの間に「とても」「どちらかといえば」の割合が82.9% (第2回学習実態調査)	昨年度より0.9%の微増となった。多様な学力層とニーズを持つ生徒に対して、一定水準を保つことができた。近年「自学」環境も提供してきたが、生徒の基礎学力や資質・能力向上のために、より効果的な学習ができるよう、定期考査や全国模試の結果の分析をベースに、Classilに搭載されている学習動画を配信し視聴を促したり、「自学のやり方」や「目標設定」に関するガイドラインを配付したりすることで、主体的な取り組みにつなげるサポートをする必要がある。	昨年度 放課後補習は効果的かの間に「とても」「どちらかといえば」の割合が82.0% (第2回学習実態調査)
③ 様々な入試方式に対応する中で、進路実績の向上を図る。	進路支援課3年学年会各教科	学校推薦型選抜、総合型選抜といった特別選抜には教員全員で関わることであった。その一方で、教員の負担も増加した。より効果的に持続可能なものにしていく対策を構築していきたい。 共通テストでは苦戦が見られ、目標を大きく下回った。難関大学においては、一定の結果は出せたと思うが、中下位層の基礎学力の向上と、粘り強く取り組む学習集団としての絶対数の増加が急務である。	【成果指標】 国公立大学合格者数	国公立大学合格者数が A 50人以上である。 B 45人以上である。 C 40人以上である。 D 40人未満である。	国公立大学合格者数は40名(現役40)であった。	特別選抜による国公立大学合格者は、総合型選抜で5名、学校推薦型選抜で11名。前年度からは3名減となった。県外の公立大学の推薦入試では厳しい結果が続いている。意欲や成績だけではなく、総合的な探究の時間や課外活動の成果を踏まえた出願検討が課題である。一般選抜での合格者は近年で最多の24名であった。3年間継続して、国公立大学を意識させた学年会の指導により、最後までこだわりをもって粘り強く取り組む生徒が多く今回の成果につながった。一方で共通テストの苦戦は続いている。新しい出題傾向によって成績の二層化がこれまで以上に顕著なものとなった。低学年における学習習慣の定着化に加え、補習を含めた学習指導の見直しが喫緊の課題である。	昨年度 国公立大学合格者数は35名(現役35)であった。
			【成果指標】 金沢大学と難関大学の合格者数  難関大:10大,東大,東医歯大,お茶大,筑波大,広島大,慶応大,早稲田大	金沢大学と難関大学の合格者数合計が A 15人以上である。 B 10人以上である。 C 5人以上である。 D 5人未満である。	金沢大学4名		難関大学の合格者が0名であった。(出願:推薦1、前期1)上位層に対して模試結果等をもとに集会等を定期的実施したりすることで、集団の強化と各教科の到達度を生徒、教員がともに確認する機会を設け、難関大学合格に向けてのガイドラインを提示していくことが必要と思われる。金沢大学合格者は4名で、2名の増加となった。次年度はより多くの合格につなげるため、近年の課題を踏まえてKUGS特別選抜に向けた指導を早め、2年特進クラスを中心に計画的に進めている。
学校関係者評価委員会評価	南加賀地区の進学校として進学実績も期待されている。多様な学力に指導も大変だと思われるが、今後も引き続き個々の志望に応じた丁寧な進路指導をお願いしたい。						
上記評価をうけた今後の改善策	多種多様な生徒の志望を実現すべく、授業だけでなく補習や添削指導を通じて進路実現を図っていく。進路に対して主体的に向き合えるよう面談を充実させていく。						

2 学習に対する生徒の意欲を高め、学習内容の確実な定着を図るとともに、「主体的・対話的で深い学び」を実現するための研究と実践を進める。

①	教師の教科指導法等の技能を高めることにより、生徒の思考力の向上に努める。	教務課 各教科	一人1台のchromebook導入により、一人ひとりが考えながら授業に取り組む機会が増えた。研究・公開授業の実施など各教科での努力により比較的良好な結果が出ている。生徒の資質や適性を把握し、ICTを活用した授業の工夫と改善を今後も地道に続けたい。	【満足度指標(生徒)】 授業において自ら深く考える機会があり、学習に対する大きな刺激を得られたという生徒の割合	授業において、自ら深く考える機会があり、学習に対する大きな刺激を得られたという生徒の割合が A 90%以上である。 B 80%以上である。 C 70%以上である。 D 70%未満である。	国語 90% 地公91% 数学 91% 理科93% 保体 95% 英語91% 情報 95% 平均92% (生徒による授業評価)	授業改善の取り組みにより全体的に高く評価されており、ほとんどの生徒が授業から良い刺激を受けていると考えている。1人1台端末を効果的に活用した授業実践が、昨年同様高い水準で維持できていることが要因のひとつと考えられる。現在取り組みはじめた「生徒を主語にする学校づくり」の視点から更に授業改善を模索していきたい。	昨年度 国語 91% 地公88% 数学 94% 理科95% 保体 91% 英語94% 平均 92% (生徒による授業評価)
②	家庭学習時間調査を通じて、生徒の学習状況を把握し、家庭学習習慣の確立に努める。	教務課 各学年会 各教科	家庭等で自主的に学習する時間が十分とは言えない。各月に教師から生徒への応援コメント強化週間を設け、全職員で生徒への声かけを充実させていきたい。また、ICTツールを活用した効率的な調査方法の確立を目指す。	【成果指標】 1日平均の家庭学習時間	目標時間を達成している生徒の割合が A 70%以上である。 B 60%以上である。 C 50%以上である。 D 50%未満である。 ※ 目標時間 1年生120分、2年生120分、3年生220分	1年 28% 2年 33% 3年 32% 平均 31% (学習時間調査4～12月平均)	考査前や考査中には学習時間が多くなる一方で、そうでないときの学習時間が少ない状況である。担任と連携して、生徒の学習時間の入力結果を各自の学習への取り組み状況の振り返りとして活用を進めたい。また、個別最適な学びとなるよう、一律の目標時間の設定を見直すことも議論していきたい。学習時間の多い生徒と少ない生徒の二極化も進んでおり、日々の学習習慣確立のための方策が必要である。時間にとらわれず、学びの方法や質の適切な評価の観点を検討していきたい。	昨年度 1年 28% 2年 41% 3年 30% 平均 33% (学習時間調査4～12月平均)
③	学習に対する生徒の意欲を高めるための取り組みを行う。	教務課 全員	昨年の家庭学習時間の目標時間を達成している生徒の割合が、50%未満となっている。昨年も学習時間調査の期間に、授業担当者や部顧問等からも可能な限り、評価・コメントを入れることになっていたが、あまり入力されていない。	【満足度指標(生徒)】 学習意欲の向上に、先生の評価・コメントが効果的であると捉えている生徒の割合	学習意欲の向上に、先生の評価・コメントが効果的であると捉えている生徒の割合が A 80%以上である。 B 70%以上である。 C 60%以上である。 D 60%未満である。	1年 61.9% 2年 70.1% 3年 67.5% 平均 66.5% (学習実態調査)	前期は65%の生徒が肯定的にとらえていたが、担任を中心とした声掛け及びコメント入力により、平均値は66.5%と微増した。今後も声掛けを続けていくとともに、入力できていない生徒の気持ちに寄り添った支援を継続し、学習時間の向上につなげていきたい。また、評価が前期から向上した第3学年の取り組みを学校全体で共有するなどしてさらなる生徒の支援を目指していきたい。	新規 前期 学習実態調査 1年62.0% 2年70.2% 3年65.1% 後期 学習実態調査 1年61.7% 2年70.0% 3年69.8%
学校関係者評価委員会評価		ICT機器を活用して生徒の主体性を引き出すよう授業改善が図られているように感じる。STEAM教育モデル校として教科横断的な学びがさらに広がることを期待する。						
上記評価をうけた今後の改善策		取組としては評価していたが、それが学習時間へは反映されていない。家庭学習に対しても主体的に取り組めるような仕掛けを考えていきたい。						

